石川 昌紀 教授
Masaki Ishikawa

学　位：博士（スポーツ科学）　University of Jyväskylä
学問分野：バイオメカニクス
研究領域：競技スポーツ、学校体育

●研究指導内容　キーワード　**生体ダイナミクス、Stretch-Shortening Cycle、トレーニング、神経科学**

神経・筋メカニクスでは、力学や神経生理学、解剖学などの知識を活用して、スポーツ・身体運動のしくみや身体運動の可能性と限界について探求する。身体運動中の中枢・末梢神経の役割、ダイナミックな身体運動中の骨格筋と神経系の相互作用、トレーニング、疲労、発育発達・加齢に伴う神経筋機能の変化などをテーマとして取り上げていく。巧みな動きの習得方法の開発、運動指導やトレーニングの科学的支援、ケガの予防やリハビリテーション方法といった応用研究に結びつけてゆける力を養うことを目的とする。とくに、中枢神経系の制御プロセス、伸張反射を代表とする末梢神経系のフィードバック、そして腱の弾性を効果的に利用する身体運動の制御プロセスに関するメカニクスの解明に着目する。

岡村 浩嗣 教授
Koji Okamura

学　位：博士（学術）　大阪市立大学
学問分野：スポーツ栄養学
研究領域：競技スポーツ、健康スポーツ、学校体育、レジャー・レクリエーション

●研究指導内容　キーワード　**運動と栄養の相互作用、運動・栄養生理生化学**

運動・栄養・休養は人間の生活の基本構成要素である。栄養とは生物が生存・成長するために必要なものを外界から取り入れ、これが体内で利用されることをいい、取り入れる物を栄養素という。この栄養素によって現れる種々の現象を栄養現象というが、これは運動や休息などの生活様式によって影響を受ける。このことは､栄養･食事を考えるときには「何をどのくらい食べるか」とともに「摂取タイミング」などの「どう食べるか」ということが重要なことを意味している。運動トレーニングの効果は運動後早期に栄養補給したほうが高いことはその一例であり、成長期の子供や高齢者が運動するときにも考慮すべきことがらである。ヒトの身体活動・運動を研究要素とする体育・スポーツ科学において栄養学を研究することの意義の一つがここにある。
（研究室 HP　www.okamurakoji.info）

下河内 洋平 教授
Yohei Shimokochi

学　位：博士（運動・スポーツ科学）　University of North Carolina at Greensboro
学問分野：バイオメカニクス
研究領域：競技スポーツ、健康スポーツ

●研究指導内容　キーワード　**スポーツ医学、スポーツ障害・外傷予防、トレーニング、アスレティックリハビリテーション**

急激な減速・加速動作を頻繁に行う球技などのスポーツでは、大きな負荷が選手の身体にかかりやすく、急性外傷や慢性障害が多く発生します。そのようなスポーツ選手の身体づくりにおいては、ただ単に力やパワー発揮能力の向上を図るだけでなく、スポーツ傷害を予防することが大きな課題となります。本研究室では、パフォーマンス向上とスポーツ傷害予防のための身体づくりの共通点と非共通点を明らかにすることを目標に、1）スポーツ傷害発生メカニズムの解明、2）スポーツ傷害の予防方法の開発や予防メカニズムの解明、3）力･パワー発揮能力およびその向上に影響を与える要因の解明、4）スポーツ傷害を予防し、且つ、パフォーマンス向上につながる合理的な動作や神経筋制御様式の解明などを、テーマとして研究活動を行っています。

土屋 裕睦 教授
Hironobu Tsuchiya

学　位：博士（体育科学）　筑波大学
学問分野：スポーツ心理学
研究領域：スポーツ文化、競技スポーツ、健康スポーツ、学校体育、レジャー・レクリエーション

●研究指導内容　キーワード　**スポーツカウンセリング、メンタルトレーニング、競技力向上、チームビルディング、実力発揮、ストレスマネジメント**

「スポーツカウンセリング論特講」では、アスリートに対する心理調査や、実際のスポーツカウンセリング事例を検討しながら、理論構築、技法開発等にかかわる実践的な調査研究を行う。また、スポーツカウンセリングにおいて用いられる面接技法やメンタルトレーニング技法、チームビルディングの技法を習得するために、スーパービジョンを伴う現場実習を行う。このように、統計的手法を中心としたスポーツ科学の調査研究と事例研究を中心とした臨床スポーツ心理学的研究に取り組みながら、スポーツカウンセリングの専門家（Scientist-practitioner）としての資質を高める。博士の学位取得と同時にスポーツ心理学会認定「スポーツメンタルトレーニング指導士」資格の取得を目指す。

博士後期課程・博士論文指導担当

冨山 浩三 教授
Kozo Tomiyama

学　位：博士（スポーツ科学）　大阪体育大学
学問分野：スポーツマネジメント
研究領域：スポーツ文化、競技スポーツ、健康スポーツ、レジャー・レクリエーション

●研究指導内容　キーワード　**スポーツマネジメント、スポーツ行動、スポーツプロモーション**

人々のスポーツへの参画がもたらす効果は、健康作りやストレス解消といった個人的な効果から、現代社会が抱える諸問題の解決に向けた社会的効果へと広がりを見せている。スポーツマネジメント研究室では、スポーツ消費者による「する」「見る」「支える」といったスポーツ消費行動について、マネジメントの視点から分析を行う一方、プロスポーツチームの地域密着戦略や地域活性化のツールとして注目を集めているスポーツと地域､スポーツと都市の関係､スポーツツーリズムについて研究を行う。また、地域の活性化を視野に入れた「する」スポーツの活性化に当たっては、スポーツ政策とも深く関わっており、スポーツ基本法とスポーツ基本計画のあり方なども研究テーマとなる。

浜田 拓 教授
Taku Hamada

学　位：博士（人間・環境学）　京都大学
学問分野：スポーツ生理学
研究領域：競技スポーツ、健康スポーツ

●研究指導内容　キーワード　**運動、トレーニング、骨格筋・脳、糖・脂質・乳酸代謝、ミトコンドリア、遺伝子、栄養**

主な研究テーマは運動による骨格筋と脳のエネルギー代謝適応効果である。運動生化学特講では、一回の急性運動による生体の迅速な代謝適応や慢性的な身体トレーニングによる代謝適応の効果とその機序に関する研究に着目し、生理・生化学的ならびに分子生物学的手法を用いて解明していく。特に、骨格筋と脳は、体内最大のエネルギー消費の主要な標的臓器であり、骨格筋や脳における代謝機能の不全は、生活習慣病の発症や認知機能の低下に関連する。そのため、本特講では骨格筋と脳に着目して、研究テーマを決定していく。ヒトから動物実験までを対象として、運動が生体のエネルギー代謝機能を高める効果とその機序を中心に分子レベルで検証していくことで、生活習慣病や認知症の予防、中高齢者の健康増進における運動プログラムの開発に繋げていく。

前島 悦子 教授
Etsuko Maeshima

学　位：博士（医学）　和歌山県立医科大学
学問分野：スポーツ医学
研究領域：競技スポーツ、健康スポーツ、学校体育

●研究指導内容　キーワード　**スポーツ医学、中高齢者、生活習慣病、運動療法**

「スポーツ医学」領域は、競技スポーツだけでなく、健康維持、増進のための健康スポーツや疾病の予防・治療のための運動療法などを含む。このスポーツ医学領域の中でも、スポーツをする際や指導する際に重要な内科学領域の医学的知識全般を学ぶ。得られた知識を基に､子どもや女性､中高齢者などを対象に､体力の維持、増進を目的とした運動指導を実践し、その中から、問題点や疑問点を明らかにする。この問題点や疑問点の中から学生が研究テーマを決定し、その課題に取り組み、論文を作成する。この一連の学習過程を通して、社会の様々なニーズに応えられる指導者を育成する。

森北 育宏 教授
Ikuhiro Morikita

学　位：医学博士　大阪市立大学
学問分野：スポーツ医学
研究領域：競技スポーツ、健康スポーツ

●研究指導内容　キーワード　**スポーツ外傷・障害、バレーボール**

近年、生活習慣病の予防・改善のため、スポーツ活動を行う中高年が増加し、年齢や障害の多様化が認められる。そのためスポーツに関わる者には成長期のスポーツ障害から加齢による変化まで広い知識が要求されるようになってきた。スポーツ医学は、既にある運動器障害の悪化防止や新たな障害を惹起しないように、運動器の生理的機能を理解し、発症メカニズムや病態、さらに実践に即した予防法について整形外科的見地から研究をすすめていく。すなわち、スポーツ外傷・障害の受傷・発生機転を十分理解するとともに、その病理、症状、治療法ならびにリハビリテーションについて研究する。スポーツ傷害について、文献検索により、疑問点を解決していく中で、まだ明らかとなっていない問題点を見つけ出し、それを解決するために実験研究を行い、文献的考察を加え論文を作成する。

◆博士後期課程担当者は全員博士前期課程・修士論文指導も担当します。
◆教員紹介は五十音順。　◆学位の表記方法は平成3年の学位規則改正前と改正後で異なります。

Masahito Asai
浅井 正仁 教授
学位：体育学士　筑波大学
学問分野：教授学（指導方法学）
研究領域：競技スポーツ

●研究指導内容　キーワード
球技の技術、戦術、パフォーマンス観察、ゲーム分析

「ゲーム分析」とは、球技のような複雑なスポーツを定量的に捉えるための手がかりであり、試合場面で出現する諸々のプレー事象を数量化することによって、客観性のある情報を作り出すひとつの方法である。「スポーツゲーム分析論特論」においては、各種球技に対応して、ゲーム中のパフォーマンスやプレー事象を様々な観点と方法で、目的とする情報を入手するための方法論を学ぶ。

Tetsuji Adachi
足立 哲司 准教授
学位：修士（体育学）　大阪体育大学
学問分野：スポーツ生理学
研究領域：競技スポーツ、健康スポーツ

●研究指導内容　キーワード
血中乳酸、女性アスリート、エネルギー代謝、ランニング

陸上競技の中長距離走やマラソンなどのエンデュランススポーツについて、生理学的尺度や手法を用いた測定・評価法によって競技パフォーマンスを明らかにし、競技力向上のための効果的なトレーニング方法を検討する。生理学的手法については、呼吸代謝のほかに乳酸代謝などの生理学的反応、加えて血液性状を分析し明らかにする。また近年、女性アスリートの活躍が注目される一方で、女性アスリートのスポーツ活動に関する諸問題（女性アスリートの三主徴）も明らかにされてきている。しかしながら、これまで中長距離走やマラソンなどの生理学的反応についての研究は、男性競技者を中心に行われており、女性を対象とした直接的な研究は少ない。そこで女性アスリートの生理学的反応を明らかにすると共に、トレーニング方法については国内外の情報収集と指導現場の情報も加味しながら検討していく。

Kumiko Ihara
伊原 久美子 准教授
学位：修士（体育科学）　筑波大学
学問分野：スポーツマネジメント、教授学（指導方法学）
研究領域：レジャー・レクリエーション

●研究指導内容　キーワード　野外教育、冒険教育

自然の特性を活用した野外教育は、本質的に多くの冒険的要素が含まれている。冒険教育とは、その要素を特に活用したものであり、特定の教育目標をもち、体験学習として組織的に行われる活動を指す。冒険教育は自分を大きく成長させるために意図的に困難に立ち向かう企てであり、それは現代の文明社会では育成しにくくなったものを育てる機会を提供する。高所を活用した、登山、ロッククライミング、ハングライダー、水中を活用したスクーバダイビング、カヤック、ヨット航海、ウィンドサーフィン、雪上や氷上を活用したスキー、スケート、雪山登山などは、自然環境や自然現象が生み出すリスクと向き合う機会を与え、心理的、社会的、教育的、身体的な効果が得られると考えられている。近年では、これらの活動は、新入社員研修やスポーツチームのチームビルディングなどの組織づくりにも活用されている。「冒険教育特論」では、冒険教育の歴史や効果、指導法、マネジメントを理解し、冒険教育の開発、実践を通してその効果を検討する。

Shouzoh Ueki
植木 章三 教授
学位：博士（医学）愛媛大学
学問分野：アダプテッド・スポーツ
研究領域：スポーツ文化、競技スポーツ、健康スポーツ、学校体育、レジャー・レクリエーション

●研究指導内容　キーワード
アダプテッド・スポーツ、障がい者、高齢者、介護予防、自主活動支援

アダプテッド・スポーツは、従来から知られている障がい者スポーツに留まらず、高齢者のスポーツや介護予防のための運動、特別支援学校等における体育活動など、運動やスポーツを実施する際に何らかの配慮が必要な人々に対応するべく、用具やルール等を工夫したスポーツの総称である。パラスポーツのように競技性の高いものから、高齢者が行う体操やレクリエーションなど、対象者の特性や目的によって行われる、様々なスポーツや運動が該当する。実施する対象者の特性を理解した上で、体を動かす楽しさや効果が最大限得られるように、新たな用具やルールを創造することにより、今後も新しいアダプテッド・スポーツの提案が求められている。そのためには、アダプテッド・スポーツの普及の支援方法や効果を評価する方法の開発などに関する研究を通じて、多くの人々にアダプテッド・スポーツを提供し、その恩恵を享受してもらうための方策を、多方面から検討する必要がある。具体的な研究方法としては、質問紙による調査や実験室、フィールドでの測定で得られたデータによる量的研究に加え、半構造化面接やグループインタビューで得られたデータによる質的研究を用いた混合研究法を活用していく。

Akemi Umegaki
梅垣 明美 教授
学位：文学修士　奈良女子大学
学問分野：スポーツ史・哲学、教授学（指導方法学）
研究領域：スポーツ文化、競技スポーツ、健康スポーツ、学校体育、レジャー・レクリエーション

●研究指導内容　キーワード
スポーツ教育、人格形成、フェアプレイ、スポーツパーソンシップ

現代社会において、人が豊かで幸せな生活を送るためにはスポーツは欠かせない文化となった。しかし、その一方で指導場面での暴力や勝利至上主義など、スポーツにおける問題も数多く指摘されている。これらの問題解決には、スポーツが発展してきた歴史的な経緯をたどりながら、スポーツとは何かという根源的な問いかけを行うことが大切である。スポーツ教育学では、スポーツを取り巻く問題状況についても議論する。そこから、スポーツの教育的価値について探求し、スポーツ教育のあり方について考察を深める。抽象的な議論に終始することなく、学校体育などの実際の指導場面を視野にいれながら効果的な教授方略についても検討する。

Kaoru Umebayashi
梅林 薫 教授
学位：体育学修士　筑波大学
学問分野：教授学（指導方法学）、スポーツ生理学
研究領域：競技スポーツ、健康スポーツ、学校体育

●研究指導内容　キーワード
体力科学、体力トレーニング、コンディショニング

パフォーマンス向上のためには、体力は重要な要素となる。「体力科学特論」では主に競技スポーツに焦点をあて、体力をいろいろな角度から科学的に分析し、理論と実践をベースにより効果的なトレーニング方法を追求していきながら授業を進めていく。そのためには、まずスポーツ種目特性に応じた体力をエネルギー系体力より分類し、走・跳・投などの基本的な運動の技術的要素も加味しながら分析を行うことによって、スポーツ種目の特性を把握する。また、エネルギー系体力の向上のための効果的な体力トレーニングおよびスポーツ種目特性に応じた体力トレーニング方法について文献を講読しながら、採求していく。また、健康づくりのための効果的な体力トレーニング法についても探求していく。

Kazumasa Ozeki
尾関 一将 准教授
学位：修士（体育学）中京大学
学問分野：バイオメカニクス、教授学（指導方法学）
研究領域：競技スポーツ

●研究指導内容　キーワード
競泳競技、スポーツバイオメカニクス、コーチング

スポーツ指導は様々な科学的知見に基づいて行う必要がある。その中でもスポーツにおける運動は力学的法則が関与しているため、技術指導やトレーニング指導を効果的に行うためには運動や力の働きを理解することが重要である。経験豊かなコーチの観察眼はスポーツにおける運動を即時的・直感的に問題点を見抜くことができるが、そのような観察眼はすぐに体得できるものではなく、客観的な評価も難しい。スポーツバイオメカニクスでは VTR や各種のバイオメカニクス的計測手法を用いてスポーツの運動を決定する様々な要因を定量化し、客観的に評価することが出来る。このようなバイオメカニクス的計測手法は手間はかかるものの、スポーツにおける運動を客観的に評価する大きな手助けとなる。本研究室ではコーチもしくはコーチを助ける科学者として得るべきバイオメカニクス的知見や計測方法を学び、実践する力を得ることを目標とする。

Hiroshi Kanzaki
神﨑 浩 教授
学位：体育学修士　筑波大学
学問分野：バイオメカニクス、教授学（指導方法学）
研究領域：スポーツ文化、競技スポーツ、健康スポーツ、学校体育

●研究指導内容　キーワード
武道教育論、技術論、上達論

武道は日本の伝統的な運動文化であり、時代とともに醸成され、また分化して今日に至っている。その伝統性の継承はいつの時代においても指導者、実践者に課せられた使命であり、このことを科学的な視点で客観化させなければならない時代になってきた。そのためには武道思想の幅広い理解と各種武道に共通した身体論の理解と究明が求められる。特に現代における武道実践者の上達論はもとより、学校における武道教育のあり方を幅広い視点で論じていく必要がある。また武道の持つ多面的特性が今日の社会においてどのような立場に立ち、どの方向に行こうとしているのかを探り、そのことへの論評を展開したい。

Moe Kosuga
小菅 萌 准教授
後・講
学位：博士（Kinesiology）　Michigan State University
学問分野：スポーツ心理学
研究領域：スポーツ文化、競技スポーツ

●研究指導内容　キーワード
リーダーシップ、コーチング、チーム、自己効力感、メンタルトレーニング

スポーツチームが目標を達成するには、効果的なリーダーシップが必須である。本研究室では、スポーツチームにおけるリーダーシップ（主に監督・コーチ、選手のリーダー）を主軸に研究活動をしている。リーダーシップとは、特定の個人が集団に影響を与えるプロセスを指す。「良いリーダーとは?」「良いリーダーになるには?」といった課題について量的・質的に探求し、スポーツ現場に活かせる研究成果をあげることを目標としている。またリーダーシップに大きく関わる要因でもある、選手個人、選手のリーダー、監督・コーチ、そしてチームの効力感（自信）についても研究を続けている。また、個人やチームへのメンタルトレーニングについても検討を行い、自身でも理論や研究結果を実践で活かすことを目標にする。
（研究室ブログ http://moemachida.com）

Takayuki Sugo
菅生 貴之 准教授
学位：修士（教育学）　日本大学
学問分野：スポーツ心理学
研究領域：競技スポーツ、健康スポーツ

●研究指導内容　キーワード　スポーツメンタルトレーニング、スポーツカウンセリング、自律訓練法、精神神経内分泌免疫学（PNEI）、心拍変動解析

スポーツ競技において実力を発揮するためには、技術的、体力的側面とともに、心理的側面が重要である。スポーツ心理学では、競技者がピークパフォーマンスを発揮するための心理的な条件や準備、試合場面での対処などを主要な研究対象としている。「臨床スポーツ心理学特論」においては、そうした競技者の心理的側面に対して、どのような支援をすることができるかを検討していくことをテーマとしている。スポーツ選手への心理的支援の主要概念であるスポーツメンタルトレーニングとスポーツカウンセリングについて理解を深め、実践家としてどのような支援を行うかについて検討していく。また、そうした心理的支援の方法論に関しては、いまだ科学的に効果が実証されたものは少ない。そこで、研究対象としてはそれぞれの心理的技法の効果を判定するために、質問紙や生理・生化学的指標（PNEI）などを用いて正確なアセスメントが可能となるように検討していく。

Junya Sone
曽根 純也 教授
学位：修士（体育学）　筑波大学
学問分野：スポーツ史・哲学、教授学（指導方法学）
研究領域：競技スポーツ

●研究指導内容　キーワード
発生学的運動学、現象学、身体知

運動を実行する際に、何が「わかる」と「できる」ようになるのかを論じることによって「身体知」の存在を示す試みをしていく。また、スポーツ現場における自己と他者の間に生起する生々しい思いや意図を適切につかむことで、主観的と捉えられるスポーツ現場の体験でも、価値ある体験の存在を探索し、それらを可能な限りあるがままに捉えて提示することによって生の実相が見えて来るような考察を進めていきたい。

Megumi Takamoto
髙本 恵美 准教授
学位：博士（体育科学）　筑波大学
学問分野：バイオメカニクス、教授学（指導方法学）
研究領域：競技スポーツ、学校体育

●研究指導内容　キーワード
運動能力・動作、発育発達、トレーニング

①ヒトの運動・スポーツの基本となる走・跳・投運動を中心に、それらの能力・動作の発達過程について検討する。また、これらの能力・動作を高めるための効果的な学習教材を開発し、実践を通してその効果を検討する。②競技スポーツ（特に陸上競技）のパフォーマンス向上に関わる課題について検討し、効果的・合理的なトレーニング方法について検証する。①、②はともに、基礎的な理論を理解した上で、実践を通して効果の検証を行うことを目標とする。

Yosuke Tezuka
手塚 洋介 准教授
学位：博士（心理学）　同志社大学
学問分野：スポーツ心理学
研究領域：スポーツ文化、競技スポーツ、健康スポーツ、学校体育、レジャー・レクリエーション

●研究指導内容　キーワード
感情、ストレス、実験心理学、スポーツ精神生理学

感情（emotion）は、外へ（e-）の運動（motion）という語源が示すよう、スポーツ（および運動や他の身体活動）の実施と密に関連する心理的現象である。スポーツ心理学において感情は、実に多様な観点から研究されている。たとえば、競技スポーツにおける“緊張・あがり”とピークパフォーマンスとの関連性、健康スポーツの継続因としての“ポジティブ感情”の機能、スポーツ観戦における“感動”など枚挙にいとまがない。最近では、心理学の基礎的知見を参照し、スポーツ実施者の感情表出を探ろうといった研究も行われつつある。本研究室では、感情スポーツ心理学という枠組みのもと、種々の心理学的手法を駆使して感情の機能や役割を検討し、スポーツと感情にまつわる諸現象の体系化を目指している。

Tomo Tokuyama
徳山 友 准教授
学位：博士（Sport Administration）University of Louisville
学問分野：スポーツマネジメント
研究領域：競技スポーツ、健康スポーツ、レジャー・レクリエーション

●研究指導内容　キーワード
スポーツビジネスマネジメント、スポーツ消費者行動、マーケットセグメンテーション

スポーツを産業としてとらえる際に必要な視点として「スポーツを商品として考える」がある。つまり、商品であるスポーツを消費する「スポーツ消費者」の理解は不可欠となる。多様化する消費者のニーズや特性を把握したうえで（スポーツ消費者行動）、潜在マーケットの分析をもとに顧客グループを細分化し（セグメンテーション）、的確なターゲット顧客の選定（ターゲティング）がスポーツにおいてもビジネスの成功に大きく影響する。この一連のプロセスはマーケティング全体の基礎部分であり、後に続くマーケティングプラン立案の指標となることから重要なプロセスである。したがって、本研究室ではビジネスの視点でスポーツをとらえ、これらのプロセス（スポーツ消費者行動・セグメンテーション・ターゲティング）を研究のテーマとし、理論と実践をもとに研究を進めていく。

Toshiro Nakafusa
中房 敏朗 准教授
学　　位：教育学修士　奈良教育大学
学問分野：スポーツ史・哲学
研究領域：スポーツ文化、競技スポーツ、学校体育

●研究指導内容　キーワード
イギリス・スポーツ史、スポーツ技術史、スポーツ用具史、大阪のスポーツ史

人文学の常として、研究室単位で特定の研究テーマを設定することはない。関連資料の存否や資料へのアクセスの可否によって研究の進展が左右されるが、基本的には各人の好奇心や興味関心に即したテーマ設定を尊重する。その上で、自ら発掘した文献資料を手掛かりとして、研究課題の解明を目指す。その際、いかなる分野であれ、他者の多様な観点から批判、反論、意見、助言等を自らの研究にフィードバックさせることが重要である。その意味では古代ギリシア以来の知的ダイアローグの伝統を継承したいと思う。私自身はイギリスのフットボール史研究を出発点としているが、1980年代の「社会史」の洗礼を受けた世代なので、スポーツそのものの歴史と同時に、スポーツを成立させる（あるいは成立させない）時々の社会の動きに強い関心がある。

Takeshi Nakayama
中山 健 准教授
学位：修士（体育学）　鹿屋体育大学
学問分野：スポーツ社会学
研究領域：スポーツ文化、競技スポーツ、健康スポーツ、レジャー・レクリエーション

●研究指導内容　キーワード
中高齢者、身体活動実施、人的支援、行動変容、社会関係資本

中高齢年代層における身体活動（スポーツ）実施者の増加にかかわる他者からの働きかけに関する研究を事例として、スポーツ行動モデルの理論化について研究を行なう。この研究事例は、中高齢年代層における身体活動実施者の増加が我が国における国民医療費の抑制に資するという社会構造を安定的に維持する機能主義的な立場に繋がる。そのため、中高齢年代層における多様な身体活動実践を捉えることができないという他理論からの批判を受けることになる。しかしながら、健康志向の身体活動実施者から競技志向でのスポーツ活動実施者へと変容を遂げる中高齢者も報告されている。したがって、機能主義的な立場から社会構造のダイナミックな変容、すなわちスポーツ文化の変容に寄与できるのではないかと考え、この視点から研究を進めたいと思う。

Yoshinori Fukuda
福田 芳則 教授
学位：教育学修士　東京大学
学問分野：スポーツマネジメント、教授学（指導方法学）
研究領域：学校体育、レジャー・レクリエーション

●研究指導内容　キーワード
野外教育、レジャー・レクリエーション、プログラムマネジメント、野外スポーツ

野外教育は、自然の中で自然の特性を最大限に活用しての教育方法である。特に自然の中での身体的・スポーツ的活動や余暇活動（レジャー・レクリエーション）を手段とした活動・事業が、参加者にいかなる効果を及ぼすかについて様々な視点・研究方法論をもって言及する。また高度職業人の育成を目指し、特定の目的を持った活動・事業を円滑に企画・運営し一定の成果を得るための環境整備（プログラムマネジメント）の方法についても探求する。これらの成果は、主に教育の場、余暇活動の場で活用が図られている。

Toshiyuki Fujihara
藤原 敏行 准教授
学位：博士（Physical Education & Recreation）University of Alberta
学問分野：バイオメカニクス、教授学（指導方法学）
研究領域：競技スポーツ

●研究指導内容　キーワード
スポーツバイオメカニクス、動作分析、運動技術分析、コーチング、体操競技・器械運動

ヒトは自分の身体の動きを、各感覚器官が知覚した情報と経験をもとに「動きの感じ」として捉えており、ときには錯覚や誤解が生まれたり、個人間の差があったりする。それは他者の運動を観察する場合においても同様である。身体運動をバイオメカニクス的に分析、評価することは、その運動の力学的構造や技術を客観的に捉える上で有効である。巧みなスポーツ選手の動作にもさらに改善できる点があり、未熟な動作の中にも本質的に理に適った動きがあることも考えられる。つまり、優れた動作の優れている理由、あるいはその逆を知ることが重要であると言える。科学的手法や思考法に慣れ親しむことは、感覚的・経験的思考のみに頼ることなく、また一方で科学という語に振り回されることなく、より信頼性、妥当性の高い情報を見極める助けとなる。主観と客観の狭間でスポーツ動作に関わる実践的な知の発見・創出・蓄積・活用・伝承について検討していく。

Junya Fujimoto
藤本 淳也 教授
後・講
学位：体育学修士　鹿屋体育大学
学問分野：スポーツマネジメント
研究領域：競技スポーツ、健康スポーツ、レジャー・レクリエーション

●研究指導内容　キーワード　スポーツビジネス、スポーツ消費者行動、スポーツスポンサーシップ、チームブランディング、プロスポーツ、スポーツ振興

スポーツマーケティングは、スポーツ消費者の視点を軸としたスポーツの価値創造の理論と実践であり、その適応領域はプロスポーツ組織から地域スポーツクラブまで、また、するスポーツからみるスポーツまで幅広い。「スポーツマーケティング論特論」では、スポーツマーケティング理論の理解、リサーチ力の向上、マーケティングプラン立案力の向上を目指す。具体的には、消費者の特性を一般製品・サービス・消費者との比較において、理論的に理解する。また、関連文献のレビューとディスカッション、スポーツビジネス界の情報収集を通してリサーチ力を高める。そして、これらを活かしてスポーツマーケティングプランを学び、スポーツビジネス界におけるマーケティング戦略企画力の向上を図る。

Takafumi Fuchimoto
淵本 隆文 教授
後・講
学位：体育学士　大阪体育大学
学問分野：バイオメカニクス
研究領域：競技スポーツ、健康スポーツ、学校体育

●研究指導内容　キーワード
動作分析、力の測定、競技力向上、指導法

主に身体運動の動きに関する研究を行っている。動きを調べるにはビデオ映像を用いる方法、力を測定する方法、筋活動を調べる方法などがある。動きを分析すると、スポーツの一流選手や熟練者はどのような特徴があるのか、発育に伴い動きがどう変化するのか、加齢に伴い動きや力はどう変化するのか、性差はどの程度あるのか、ある種目における有効なトレーニング方法はどのようなものか、ある特定のトレーニングの意義は何か、スポーツ種目によって動きに特徴があるのかなどを調べることができる（かも知れない）。最近行った研究は、「あん馬の両足旋回に関する分析」「メディシンボール側方投げのトレーニング意義に関する研究」「バレーボールにおける最大スパイク高測定装置の開発」「トランポリン競技の宙返りに関する動作分析」「高齢女性の歩行における爪先高に関する研究」「三段跳びの助走イメージに関する研究」などである。

Takaaki Mishima
三島 隆章 教授
学位：博士（学術）　広島大学
学問分野：スポーツ生理学
研究領域：競技スポーツ、健康スポーツ

●研究指導内容　キーワード
スポーツ、運動、骨格筋、筋疲労

最大努力で筋収縮を反復して行うと、発揮張力が漸減する現象を一般的に筋疲労と呼ぶ。スポーツや運動等を継続して行う場合においても、パフォーマンスは徐々に低下し、やがてスポーツや運動自体を行うことが困難となるが、スポーツや運動を継続して行うとともに生じるパフォーマンスの低下の要因のひとつに筋疲労が関与していると考えられている。特にスポーツ競技を行う場合、筋疲労が競技成績に影響を及ぼす可能性が高いことから、筋疲労について理解することはたいへん有意義なことである。そこで研究テーマとして筋疲労について着目して、ヒトから実験動物までを対象に、特に筋疲労と骨格筋機能との関連性等について検証を進めていくこととする。

Kotaro Miyachi
宮地 弘太郎 教授
学位：修士（体育科学）　日本体育大学
学問分野：教授学（指導方法学）
研究領域：競技スポーツ

●研究指導内容　キーワード
テニス、球技、ゲームパフォーマンス

コーチの由来は、ハンガリーの Kocs という場所で、最初に作られた『屋根付きの馬車』kocsi に由来し、馬車が人を目的地まで運ぶことから、『コーチング』を受ける人＝クライアントを目標達成に導くことが本質である。また、コーチング学は、現場で起きている実践経験を帰納的に抽出し理論を一般化する領域である。本講義において球技（ネット型、ゴール型、ベースボール型）に焦点をあて、ゲームのパフォーマンスを、ソフト（SPORTSCODE,GAMEBREAKER）等を用いて定量化する方法論を学習する。更には、球技パフォーマンス（特に実践現場）には数多くの要因が複雑に絡んでおり、量的にフィードバックするには困難である側面もある。したがって、質的な分析法（学習者の動きを改善するために用いる分析法）（運動の質に関する主観的判断）（運動の専門家の意見）を一般的、普遍的法則を用いてからのアプローチの手法も学習する。

◆ 後・講 教員は、博士後期課程・講義も担当します。◆教員紹介は五十音順。
◆学位の表記方法は平成3年の学位規則改正前と改正後で異なります。

[研究施設]

健康科学実験室
三次元磁気自動動作解析システム、地面反力計、筋電計、等速性筋力測定器、体幹筋力測定器などが完備され、スポーツ医学の実験や測定が行われます。

生理・生化学実験室
運動生理・スポーツ医学的研究を行うため、スポーツ医学実験室、生化学実験室、生理学実験室など多様な実験室が完備。

総合実験室
気温、温度や風速が設定できる環境制御室をもつ実験室。『暑・寒環境での運動における留意点』など、さまざまな実験が行われます。

バイオメカニクス実験室
ビデオ画像をパソコンに取り込み、人の動作やスポーツ技術・戦術などを解析します。同時に地面反力やEMG、超音波画像なども測定します。

スポーツ心理学実験室
実験室・データ処理室・パッケージルーム・カウンセリングルームの4ブロックで構成。スポーツ選手の「こころと身体」の相互作用を測定・分析します。

社会調査室
スポーツ・レジャー・レクリエーション参加やスポーツ観戦などのデータ分析、プレゼンテーション資料の作成など、社会現象を調査・分析します。

〈その他の研究施設〉
- ●走査型電子顕微鏡室
- ●スポーツ栄養学実験室
- ●試料分析室

[図書館]

国内外約 192,000 冊の専門書、学術雑誌、電子媒体資料が充実。
和洋の体育科学・スポーツ医科学・教育学等の専門資料を中心に教養書、スポーツ関連欧文貴重書等約 192,000 冊、専門研究に役立つ和洋雑誌約 3,360 種を所蔵。各種データベースおよび電子ジャーナルや電子ブック等も図書館ホームページから利用できます。http://lib.ouhs.ac.jp/

蔵書検索
本学で所蔵している資料の検索は図書館ホームページの「学内所蔵資料検索／OPAC」より行えます。

グループ学習室、閲覧個室
ゼミなどグループでの利用に便利なグループ学習室。論文やレポート作成などに意識を集中して利用できる閲覧個室はキャレルデスクを完備。

視聴覚コーナー
AV 機器が設置され、図書館所蔵の電子媒体資料の視聴ができます。

BRITISH SPORTS AND SPORTSMEN
全 15 巻が揃っているのは日本で本学を含めて2校のみという希少なもの。この他にも貴重なコレクションを所蔵しています。

[医療施設・附置施設等]

診療所・酸素カプセル
スポーツ整形外科と内科があり、保険証を持参すれば保険診療を受けることができます。
当日予約にて疲労回復や睡眠不足などに効果がある高気圧酸素カプセルを利用することができます。

スポーツ科学センター
スポーツ科学・医学等の最先端の研究、充実した施設、器具、機材を活用し『教育』『研究』『実践(現場)』と連携して各クラブの競技力向上の支援を行っています。

情報処理センター
パソコンを快適に利用できる環境が整備されています。今や欠かすことのできない情報処理教育・IT サービスに対応しています。

教職支援センター
模擬授業教室や集団面接室・個人面接室を備えており、教員採用試験の現役合格者を増大させることを目標としたサポート活動を行っています。

学生相談室・スポーツカウンセリングルーム
臨床心理士やスポーツメンタルトレーニング指導士の資格を持つスタッフが、さまざまな相談に応じます。より充実した学生生活、競技生活をサポートします。

社会人の学びの場として

大阪体育大学大学院では、社会人、アスリート、大学教員など、仕事や競技を続けながら、大学院生として両立されている方が多く在籍しています。大学学部を卒業し、そのまま進学される方も、もちろん多く在籍しており、多種多様な大学院生たちが切磋琢磨できる環境です。インターンシップ制度も充実しており、国立スポーツ科学センター（JISS）での長期インターンシップ※も実施しています。社会人の学びなおしだけでなく、定年退職後の学びなおし、マスターズ選手の実践の場を兼ねた学びなおしなど、様々な方向から支援します。

※博士後期課程が中心となって実施しています。

国際交流事業 海外との活発な交流で世界レベルをめざす。

海外の大学や研究機関との学術・スポーツ交流を推進し、さらなる教育・研究フィールドの拡大につなげています。
学内教員組織に国際・地域交流委員会を設置。それぞれの協定内容に沿った交流事業に取り組んでいます。

大阪体育大学の国際交流協定

西安体育学院	中国	学術・スポーツ協定	教員、大学院生を含む学生、両大学が認める人材が対象。 研究・調査・視察およびスポーツ交流、文献や情報の交換、留学などを行う。
ウエスタン大学	カナダ	交換プログラム	研究者の交流や学術および教育学的資料の交換、語学研修、共同研究プログラムの調整などを行うことを目的としたプログラムで、学生が交換留学生として選出され、参加する。
台湾国立体育大学	台湾	学術交流協定	教員間の交流と連携をとおして、教育交流と共同研究を行うことができる。 学部学生、大学院生は、希望すれば交流の機会が提供される。

大学院では、締結大学とのインターンシップ制度を設けており、経済的支援も行っています。

学位の授与および取得免許

1 大学院博士後期課程の修了者には「博士（スポーツ科学）」の学位を授与し、博士前期課程の修了者には「修士（スポーツ科学）」の学位を授与します。博士後期課程は３年以上、博士前期課程は２年以上大学院に在学し、所定の単位（博士後期課程 10 単位以上、博士前期課程 30 単位以上）を修得するとともに学位論文の最終試験に合格することにより、修了となります。

2 教育職員免許法の定める所定の単位を修得すると、中学校・高等学校教諭専修免許状（保健体育）が取得できます（但し、中学校・高等学校教諭１種免許状（保健体育）既取得者のみ）。

3 本学体育学部健康・スポーツマネジメント学科健康スポーツコースを、健康運動指導士認定試験を受験するために必要な科目を未修得（４単位以内）で卒業後、科目等履修生として未修得科目の単位を取得すると（卒業後４年以内の者に限る）、健康運動指導士認定試験の受験資格が得られます（本大学院では、体育学部開講授業科目のうち１年間で３科目以内に限り、受講料免除で受講できます）。

奨学金制度

1 大阪体育大学大学院研究奨学金制度
本学独自の奨学金制度です。
博士前期課程は、各年次５名の奨学生に月額５万円（年額 60 万円）の奨学金を１年間給付します。１年次生は入学後に募集を行い、入学試験の成績で判定されます。２年次生は、前年度の学業成績および研究業績で判定されます。返済の義務はありません。
博士後期課程は、各年次３名の奨学生に月額５万円（年額６０万円）の奨学金を給付します。入試（A日程）出願時と同時に募集を行い、入学試験の成績および研究業績で判定されます。期間は３年間で、返済の義務はありません。

2 その他の奨学金
給付型奨学金制度として、小野奨学会、戸部眞紀財団などがあり、採択されています。
貸与型奨学金制度として、日本学生支援機構も利用可能です。また、特に優れた業績による返還免除制度があります。

主な進路（2011～2017年度）

大学・その他教育および研究機関
大阪体育大学／関西大学／大阪産業大学／大阪国際大学／天理大学／九州共立大学／四国学院大学／仙台大学／関西医療大学／神戸医療福祉大学／藍野大学／太成学院大学／羽衣国際大学／金沢学院大学／明治国際医療大学／武庫川女子大学／大阪成蹊大学／追手門学院大学／桃山学院大学／金沢星稜大学／専修大学／法政大学／香川県藤井中学校／兵庫県立淡路三原高等学校／東大阪市立池島中学校／大阪青凌高等学校／履正社医療スポーツ専門学校／大阪リゾート＆スポーツ専門学校／国立スポーツ科学センター／大阪体育大学スポーツ科学センター／日本スポーツ振興センター　他

プロスポーツチーム・一般企業　他
ガンバ大阪／セレッソ大阪／ジュビロ磐田／アビスパ福岡／柏エンゼルクロス／㈱アシックスビジネスエキスパート／スポーツウィル㈱／日本年金機構／三井住友海上火災保険㈱／スズキ㈱／京都トレーニングセンター／大津市立葛川少年自然の家　他

託児施設紹介：スマイルピース保育学園

泉佐野市中庄 1740－1　072-461-0720

本大学院では、小さいお子様がいる方でも大学院で学んでいただけるように、保育園の紹介を行っています。詳細は、直接スマイルピース保育学園へお問い合わせください。